

「浦子手記」研究ノート

吉 岡 義 信

1. はじめに

本学図書館に三浦梅園著作の複製（コピー）が所蔵されています。その中に「浦子手記」と呼ばれる一群の手記があり、これに梅園の読んだ書物のリストが記されているということで、梅園の読書遍歴がわかるのではないかと調べてみることにしました。とは言ってもまだ途についたばかりであり、とりあえず概略を述べてみることにしたいと思います。

梅園について、名前やその主な著作については耳にしたことはあっても、詳しいことは知らず、まして旧宅など訪れたこともないのでは話にならないということで、11月に旧宅に行き梅園についての話を聞き、また「浦子手記」等の現物も見せてもらうことができました。

2. 三浦梅園について

梅園は享保8年（1723）に現在の安岐町に生まれ、寛政元年（1789）に67歳で亡くなっています。名前は晋（ススム）、字は安貞（アンテイ）と言い、「梅園」というのは塾の名称であるという説が有力です。家業は祖父の代より医者で、梅園自身も医者であり、なおかつ弁証法的思考法により独創的な宇宙論である条理学を構築した自然哲学者であります。主な著作に「玄語」（ゲンゴ）「贅語」（ゼイゴ）、「敢語」（カンゴ）のいわゆる梅園三語があります。

3. 「浦子手記」について

梅園の手記は全部で67冊あり、その中の1冊に「浦子手記」とあることから全体を総称して「浦子手記」と呼ばれています。田口正治著『三浦梅園の研究』によると、表紙に「甲一」「甲二」…と記されており、年代順に並べてみると延享元年甲子（1744年 22歳）から没する4年前の天明5年乙巳（1785年 63歳）までにわたっています。この中の一部に目次があり、書名を列記し各書物について短いのは数行から多いのは数頁にわたって抜粋、また得難い書物は全部写本してあるものもあります。要するに梅園の読書備忘録とも言えるもので、これは家伝によると他人に見せるようなものではないという遺言のため『梅園全集』にも収録されていないとのことでもあります。

またこの中で「甲五」と「丙十」が欠けており、このうち「丙十」については、『梅園研究7号』に中尾弥三郎氏の「浦子手記丙十発見経緯とその概要」と題する記述があり、昭和58年に山香町のある個人が所蔵しているのが発見されたとあります。ちなみにこの「丙十」のコピーも本学が所蔵しています。

この手記について先述の『三浦梅園の研究』に解説と各冊の目次を記したものが付録として掲載されています。またその後の調査で『大分県史料・先賢資料一』に高田真治博士による「浦子手記の概要」という解説と本文が収録されていることが判りました。しかし、この読書記録に関する研究については調査した限りなされていないようであります。

「浦子手記」67冊の内訳をみると甲本14冊（欠本甲五を除く）、乙本11冊、丙本11冊（丙十を含む）、丁本3冊、戊本6冊、己本15冊、庚本8冊となっています。また記されている書物の数を調べてみると、重複の分を含めて650冊余になるようです。これらの書物の一々の検討は後日にゆずることにして、昭和52年に梅園旧宅に保管されている書物の調査が行なわれた際、その概要が明らかになっている2000冊余りの書物との比較検討も今後の課題となってくるであろう。

以上、今回は概略の説明のみに終始しましたが、平成7年11月の旧宅訪問の際に本学元教授阿部義郎先生はじめ三浦家ゆかりの方々、安岐町教育委員会の富永六男氏のご尽力により、ご多忙中にもかかわらず、梅園に関する説明や貴重な資料を見せていただいたことに感謝し、紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

なお本稿は平成7年12月に行なわれた、西日本図書館学会大分県支部会における発表要旨に修正・加筆をしたものです。この原稿を提出した後、平成8年6月に西日本図書館学会において発表しており、詳細は同会誌『図書館学』69号に掲載されていますのでご覧いただきたい。

（よしおか よしのぶ 別府大学）